JAPANESE DEAF NEWS

日本聴力障害新聞

2022年 9 月13日
〈号外〉月刊１日発行

発行人・石野富志三郎　編集人・中橋道紀
購読料 4,300円（年間、郵送料・税込）　郵便振替口座 01060-5-28898
日聴紙のホームページ：http://jdn.jfd.or.jp/　メールアドレス：jdn@jfd.or.jp

発行所　一般財団法人 全日本ろうあ連盟
編集部（〒602-0901）
京都市上京区室町通今出川下ル
繊維会館内
FAX 075-441-6147
TEL 075-441-6079

＜緊急特報・臨時号＞

夏季デフリンピックの日本開催決定に伴い、緊急的な報道の必要性を鑑み、通常号と異なる紙面建てで、ネットのみの発行をすることといたしました。

なお、この紙面は本紙2022年10月１日号にも綴じ込みますので、予めご了承ください。日本聴力障害新聞編集部

悲願（ひがん）成就（じょうじゅ）

第25回夏季デフリンピック 日本開催決定！

誰もが住みやすい社会をめざす大会へ

3年後に東京で！ 福島・静岡でも

国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）は、9月10日（日本時間同月11日未明）に総会（於・オーストリア・ウィーン）で、第25回夏季デフリンピックを日本で開催することを正式に決めました。3年後の2025年11月15日から26日の期間、東京都を中心に、福島県・静岡県で全21競技が繰り広げられます。日本の選手たちの積年の夢、史上初の日本開催の実現に全国各地が喜びに湧きました。

全日本ろうあ連盟からはICSD評議員として久松三二事務局長、倉野直紀本部事務所所長と川上恵国際手話通訳者が総会に出席。久松局長が第25回夏季デフリンピックの開催地について立候補のプレゼンテーションをしました。対立候補国はなく、その後、出席58カ国の採択（評議員174人。採択権は1カ国に1票のみ）で満票近くの承認を得て日本開催が決定。多くの拍手が湧き起こりました。

総会では他に、前回の総会等の議事録の承認をはじめ、会費未納国への対応等の審議や、今後のデフリンピック開催の見込みと進捗報告、役員改選等が行われました。

第25回夏季デフリンピックの日本開催決定後、ICSD会長からデフリンピックの旗を受け取り、会場の拍手に応える久松局長（右端）

ろう者主体の大会を

デフリンピックは、ろう者主体で運営する、ろう者のためのオリンピックです。1924年にフランスで夏季大会が開催されて以来、五輪と同様に4年おきに行われ、今度の第25回夏季デフリンピックは100周年を迎える記念すべき大会になります（冬季大会は1949年にオーストリアで初開催）。

連盟は文部科学省、JOC（日本オリンピック委員会）、東京都の支持証明を得た上で開催国として立候補し、国連が提唱する〝誰一人取り残さない世界〟をめざす大きな取り組みの1つとして進めていく決意を述べました。また、東京2020オリンピックのレガシー（遺産）を活かしてコストを抑えた大会の形で開催し、選手が競技に集中できる環境や安全で円滑な移動体制を整備していくことを表明しました。

参加国・地域の参加については過去大会の実績を基に、約70～80カ国、約5000～6000人を見込んでいます。

多くの連携で共生社会へ

1964年の東京パラリンピックを機に障害者への意識が変わり、東京2020パラリンピックにより街や心のバリアフリーが推進されました。

連盟は、きこえない子どもや選手に大きな夢を与え、デフスポーツの認知を拡大し、コミュニケーションの障壁（しょうへき）を崩し、環境の発展につなげていくことで、誰もが住みやすい社会へと変える大会にしたいとしています。

そして、3年後の夏季デフリンピックの日本開催にあたり、「あらゆる場面で心・言語・コミュニケーション・情報のバリアをなくし、誰もが心豊かに暮らせる共生社会をめざす」としています。

今後、デフリンピックの知名度をあげていくことや国際手話通訳者の増員等が大きな課題です。ろう者主体の一大イベントを成功させ、社会の大きな変革を遂げるには、国、東京都、スポーツ関係者、多くの自治体や関係団体、きこえる人たちとの連携が不可欠です。正式決定を受けた東京都の小池百合子知事は次のコメントを発信しました。

「ろうのアスリートが躍動する姿は、ろう者やろう文化への理解を深め、人々の交流をますます促していくことでしょう。デジタル技術の活用により、誰とでもスムーズなコミュニケーションを可能とする社会の創出にもつながるに違いありません。共生社会の実現に大きく貢献できるよう、大会の成功に向けて関係者の皆様と連携して取り組んでまいります」

ICSD総会等、連盟からの発信メッセージは左記URLで見られます。

https://www.jfd.or.jp/deaflympics2025

連盟代表のコメント

◆石野富志三郎理事長

開催の正式決定を心から誇りに思います。日本での開催は、障害のある人とない人とのコミュニケーションや情報アクセシビリティを推進し、〝誰一人取り残さない〟世界（SDGs）の実現に向けてさらに前進するものです。今後も様々な関係者等のご協力を得ながら取り組んでまいります。

◆太田陽介スポーツ委員会委員長

正式決定を大変嬉しく思います。開催計画案の策定にご協力いただいた関係者の皆様のご尽力に感謝します。今後、きこえる方とともに開催成功に向けて取り組み、一歩進んだ共生社会の形を示すことで、デフスポーツ・パラスポーツの発展・飛躍につなげてまいります。

第25回夏季デフリンピック競技会場(予定)　2022年９月13日時点

0	開閉会式	駒沢オリンピック公園総合運動場
1	陸上	
2	サッカー	Jヴィレッジ（福島県）
3	卓球	東京体育館
4	バレーボール	府中市立郷土の森総合体育館
5	バスケットボール	大田区総合体育館
6	ハンドボール	駒沢オリンピック公園総合運動場
7	バドミントン	武蔵野の森総合スポーツプラザ
8	レスリング（フリースタイル）	駒沢オリンピック公園総合運動場
9	レスリング（グレコローマン）	
10	空手	東京武道館
11	柔道	
12	テコンドー	キリンレモン　スポーツセンター（中野区立総合体育館）
13	水泳	東京体育館
14	テニス	有明テニスの森
15	ビーチバレー	大森東水辺スポーツ広場
16	自転車競技（ロード）	日本サイクルスポーツセンター（静岡県）
17	自転車競技（MTB）	
18	ボウリング	東大和グランドボウル
19	ゴルフ	若洲ゴルフリンクス
20	オリエンテーリング	伊豆大島
21	射撃	10m・25m：警視庁術科センター 50m：調整中

（表面の続き）

招致運動 着実に

期待背負い、官民一体の支援も得て立候補

2017年のサムスンデフリンピックで金メダルを獲得し、表彰台に立つ日本女子バレーチームの選手

日本のろう選手が初めてデフリンピックに出場したのは1965年のアメリカでの第10回夏季デフリンピック（当時は国際ろうあ者競技大会）です。その前年に東京でオリンピックが開催されたこともあり、それ以来、国内外の日本でのデフリンピック開催への期待は常にありました。

連盟はかつて、2007年に冬季デフリンピックを日本に招致する方向で取り組みましたが、手続きの不十分さ等から断念。しかし、以降も12年に世界ろう者卓球選手権大会を日本で開催し、世界デフゴルフ選手権大会の日本開催を支援する等、運営の実績を重ねてきました。

東京2020オリンピック・パラリンピック開催への取り組みとともにデフスポーツの認知度が高まり、17年には、サムスン（トルコ）の夏季デフリンピック開催の時期に合わせて、党派を超えた議員による「障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟デフリンピック支援ワーキングチーム」が発足。官民一体の支援を受けることが可能になりました。

そして、連盟は、18年の評議員会で第25回夏季デフリンピックを日本に招致することの承認を求める議案を採択し、運動に弾みをつけました。また、今年5月にブラジルで開催された第24回夏季デフリンピックへの東京都による視察が行われ、都にも同大会開催の意義へのさらなる理解が得られた上で、今回の立候補となりました。

ICSD副会長に大杉豊氏が再任

総会で役員改選

ICSDの活動を報告する大杉副会長

ICSDの総会では役員改選も行われ、会長には、立候補者4人の中から欧州連合の議員を兼任するアダム・コーサ氏（ハンガリー）が就任。副会長には、ICSDの改革委員長であった大杉豊氏（筑波技術大学教授）が多数の信任を得て再任しました。

大杉氏は「世界のデフスポーツの発展のために尽力してまいります。このことが、ひいては、日本全体のデフスポーツの発展に寄与されるものと確信します。3年後のデフリンピック成功に向けてご協力をお願いします」と述べました。

日本中が吉報に喜び

（東京・京都等で）

第25回夏季デフリンピックの日本開催に日本の各地は喜びに湧きました。

東京都聴覚障害者連盟は9月11日に都手話言語条例とデフリンピック招致をテーマにした「第68回東京都聴覚障害者大会」を江東公会堂の大ホールで開催。417人の喜びの手のひらひら拍手に包まれました（**右写真上**）。京都市聴覚障害者協会も同日、ブラジルデフリンピックの自転車競技で金メダルを獲得したウクライナ出身のエリザベス・トプチャニウク選手による講演会を開催。85人の大きな拍手が沸き起こりました（**右写真下**）。

第10回大会でメダルを獲得した高山道雄さん（栃木県）と鈴木リヲ子さん（東京都）も日本開催決定を喜びました。詳細は本紙10月1日号以降で紹介します。

本紙編集部は今後も当事者や関係者の取り組みを随時、紹介するとともに、私たちにできる様々なこと等を発信していきます。

各地のイベントで拍手

デフリンピックのこともっと知ろう！

デフリンピックの公式ロゴマーク

◆デフリンピックって何？

ろう者自身が運営するろう者のためのオリンピックです。1924年からフランスで初開催（国際ろう者スポーツ委員会運営［117カ国が加盟］）。参加選手は国際手話等によるコミュニケーションを図って交流を深めています。

◆パラリンピックとの違い

1989年に国際パラリンピック委員会が発足した当初は、国際ろう者スポーツ委員会も加盟していました。しかし、デフリンピックの「コミュニケーション全てが国際手話によって行われ、競技はスタート音等の合図を視覚的に工夫する以外はオリンピックと同じルールで運営するという」独創性を追求するために95年にパラリンピック委員会を離れました。以降、パラリンピックにろう者が参加できない状況が続いています。パラリンピックはリハビリテーション重視の考えで始まり、デフリンピックはろうアスリートとしての記録重視の考えで始まっています。しかし、現在は、両方とも障害の存在を認めた上で競技における「卓越性」を追求する考えに転換しています。

◆選手の選考方法

2年間のアジア太平洋競技大会や世界選手権大会での成績などから、ろう者の各スポーツ団体が全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会の指針で定められている基準や条件を満たしている選手を推薦します。

◆デフリンピックへの参加資格

補聴器を外した裸耳状態での聴力レベルが55dBを超え、かつ各国のろうスポーツ協会に登録していること。競技中に補聴器を装用することは禁止されています。

◆直近のデフリンピック

現在の競技数は表面記載の通り、全21競技あります。

今年5月にブラジル南部のカシアス・ド・スルで第24回夏季デフリンピックが開催され、日本勢95選手は11競技に挑み、過去最多、30個（金12、銀8、銅10）のメダルを獲得しました。

デフリンピックでは、視覚的な情報を保障した環境を大切にします

DEAFLYMPICS

聞こえない選手は、オリンピックの中では、例えば、ピストルスターターの音や審判の合図が聞こえません。

デフリンピックの競技ルールはオリンピック競技にほぼ準じています。その上で、競技に必要な音声情報やコミュニケーションの全てが、視覚的な合図（フラッシュ、フラッグなど）、国際手話などによる環境で構築されています。サムスンデフリンピックでなされた視覚的な情報保障のケースをいくつか紹介します。

サッカー競技や水泳競技での合図

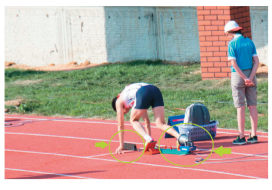
聞こえない選手たちは主審の笛が聞こえません。そのため、副審だけでなく主審も旗を持ち、シグナル（合図）を知らせます。また、水泳では、レースの最後のターンのときは、その旨を水面にしぶきを立てて知らせます。

サッカーでは、主審もフラッグ（旗）で合図

最後のターンを知らせる：水泳競技

陸上競技や水泳競技、空手競技では光で合図

フラッシュ機器を使って、光でスタートや判定を知らせています。


スタートランプ、音響装置

ランプ設置：水泳競技

ランプ設置：空手競技

強くなるために招聘（しょうへい）した監督やコーチとのコミュニケーション保障も

手話通訳

監督やコーチと選手間の指示やコミュニケーションが円滑に行われるよう、手話通訳を配置します。メディカルを受診する選手と、ドクターや看護師、トレーナーの間の診察やコミュニケーションも手話通訳で保障しています。

季刊みみ第158号（2017年冬季号）掲載紙面から